

新たな話者たちによるアイヌ語復興 ——北海道平取町二風谷を事例に——

吉本裕子

はじめに

国連において、先住民族の権利について長年議論が続けられてきたが、2007年「先住民族の権利に関する国際連合宣言（以下、権利宣言）」が採択され、アイヌを含む世界の先住民族の働きかけがようやく一つの実を結んだ。この時、日本政府も権利宣言に賛成票を投じている。翌年日本でも「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院で可決され、政府は、北海道とその周辺地域に先住してきたアイヌの人々を先住民族と認めた。その後、総合的なアイヌ政策を展開するために、権利宣言を参照しながら具体的な検討が進められ、2019年には「アイヌ施策推進法（以下施策推進法）」が成立した。この法律では、アイヌ民族が先住民族であることが初めて明記されたが、一方で、権利宣言で謳われている先住権¹に全く触れておらず、多くの課題を残したままの法律となっている。

明治以降、国による同化政策が本格化し、アイヌ語は和人化教育の基で衰退の一途を辿ることとなったが、アイヌの人々によって言語復興運動が始められるのは概ね1980年代に入ってからのことである。1976年からアイヌ語に関わってきた言語学者の中川裕〔1999〕によれば、当時アイヌ話者はまだ多く存在し、そうした話者に話を聞かせてもらうことはそれほど困難ではなかったという。アイヌ差別が厳しい時代にも、個人的にアイヌ語を次世代に残そうとする動きは若干見られたものの、民族全体として、言語を復興しようという機運は感じられず、研究者でさえ、言語復興運動

が将来高まると考えていた人は当時誰もいなかったと述べている。こうした状況に変化を起こす一つのきっかけになったのは、元国会議員で平取町出身のアイヌ文化研究者であった萱野茂（1926-2006年）である。1983年に私設の「二風谷アイヌ語塾」を開き、地域の子どもたちにアイヌ語を教え始めた。その後、私塾はアイヌ語教室となり北海道ウタリ協会（現、北海道アイヌ協会）の事業として運営され、道内各地にもアイヌ語教室が複数開設されることとなった〔中川 1999, 平取町二風谷アイヌ語教室 1988〕。

アイヌ語継承のさらなる展開は、1997年に制定された「アイヌ文化振興法²（以下、文化振興法）」にもみることができる。文化振興法が成立したことで、「公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（以下、アイヌ文化推進機構）」（現：公益財団法人アイヌ民族文化財団³ 以下、アイヌ文化財団）が設立され、国と北海道からの補助金によって、アイヌ文化の振興等が進められている⁴。文化振興法の下では、アイヌ語は、音楽・工芸・舞踊・その他の生活様式などとともに「アイヌ文化」の一つとされてきた。国連の権利宣言では、先住民族の言語を再活性化し、使用してゆく権利が謳われているものの、日本では施策推進法施行後も、アイヌ語は文化振興法と同様に「アイヌ文化」の一つとして扱われ、言語に関する権利を曖昧にしたまま、アイヌ語の振興が図られている。

2009年にUNESCOが発表した“Atlas of the World’s Languages in Danger”では、アイヌ語は消滅の危機にある言語（極めて深刻）に分類された。現在、日常の生活用語としては、ほとんど用いられることがなく、母語話者はゼロとなったが、アイヌ文化財団の事業のほか、地方自治体の補助金によるアイヌ語教室や草の根的な活動をとおして、口承文芸を含むアイヌ語は継承されている。現在の話者人口は数人～数十人と推定されている⁵。

一方で、近年アイヌ文化関連施設等ではアイヌ語の実用化に向けた動きも見られる。例えば2020年7月、北海道白老町に開業した国立アイヌ民族

博物館を含む民族共生象徴空間（愛称ウポポイ）では、施設内の第一言語をアイヌ語とし、展示解説パネルや施設表記の多くにアイヌ語を用いている。また、アイヌ民族の少女を主人公にした漫画『ゴールデンカムイ』が人気を博しており、その影響から言語・文化に関心を持つ人が増えつつある。さらにアイヌ民族の若い世代の中にもアイヌ語を話せた方が「カッコいい」という意識を持つ者が現れていることも事実である。

本稿では、北海道平取町におけるアイヌ語継承活動の歴史の変遷を振り返りつつ、行政やアイヌ文化財団によるアイヌ語関連事業と草の根的なアイヌ語会話学習会との連関から出現する新たな話者たちの実践や語りに注目し、言語復興と言語イデオロギーとのかかわりを考察する。

1. 先行研究と本稿の目的

近年のアイヌ語復興に関する先行研究では、アイヌ語の学習場所に応じて、教授法・学習方法・教材内容などが報告されてきた〔田村 2011, 成田 2015, 渡邊 2018〕。こうした先行研究では、アイヌ語学習の機会の増加を評価しつつ、その課題点や可能性が提示されてきたが、社会状況と深く関わる言語イデオロギーについて検証したものは管見の限り見当たらない。また、学習者の習得状況を具体的な指標を用いて論じた論考も極めて少なく、言語学者の丹菊逸治〔2020〕が、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠：Common European Framework of Reference for Languages）⁶を参照しつつ、アイヌ文化推進機構等のアイヌ語教育事業による学習者の習熟度や運用レベルを論じているのが唯一だろう。

文化振興法制定以降、アイヌ文化振興機構（現、アイヌ文化財団）では、「親と子のアイヌ語学習」「アイヌ語入門講座」「上級講座」「指導者育成事業」等が行われてきたが、丹菊〔2020：42-43〕によれば、こうしたアイヌ語教室事業は、主として学校方式（1対多）で規模も展開も大きいのが、事実上、初級が再生産されるサイクルとして閉じたエコシステムになって

いると指摘している。ここでいう初級とは、CEFRにおけるA1⁷、A2⁸（＝基礎段階の言語使用者）程度を指す。

その要因の一つは、アイヌ文化振興機構の講座には、中級話者を育成する講座が存在しないにもかかわらず、中級話者を受講対象にした「上級講座」が設置されているという矛盾がある。また、「指導者育成事業」を担当する講師の報告等によれば、指導者を目指す講座であっても中級者が集まっているわけではないという。それに加え、授業時間数が少なすぎるため、アイヌ語能力を飛躍的に向上させることは困難であることも指摘されている⁹。よって「上級講座」も「指導者育成事業」も事実上、中級・上級話者、ましてや指導者の育成を目的にしているとは言い難いのである〔丹菊2020：26-29〕。

また、2010年までアイヌ文化振興機構主催の各講座では、所定のテキストがなく講師が各自で教材を準備していたため¹⁰、2011年度以降、方言別テキスト（入門、初級、中級、上級）の製作が検討されたが、現段階では上級編は執筆されていない。「入門、初級、中級編」まで刊行されているとはいえ、内容的には通常の語学では初級相当であり、民間で刊行された教材を含めても中級者・上級者向けの教材が不足しており、中級以上にまで進むことができないという〔丹菊 2020：22-23〕。

加えて、アイヌ文化財団主催のアイヌ語弁論大会（イタカンロー）では、口承文芸部門への出場者が多いが、これらも文化の普及・啓発のための活動に近いとされる。神謡等を「暗唱して語ること」は、初学者にとって有益な学習法であることは確かである。全く意味が分からないものを丸暗記するのは困難だが、初級の知識さえあれば口承文芸は格段に覚えやすくなる。よって、実質的に口承文芸の暗唱は初級のアイヌ語力があればできることであり、口承文芸部門ではそれ以上のアイヌ語を習得しているか否かは問われていない。文化振興法成立後、口承文芸は、舞踊や工芸と同じように学習し、「伝統文化」として和人に披露するものになったといえる〔丹菊 2020：26, 31-35〕。つまり、公的・準公的な事業では、言語を実用化す

る段階まで想定していないことを含意している¹¹。

他方で、草の根的な言語継承運動では「1対1」法やイマージョン（没入法）を併用した活動が小規模ながら続けられてきた。現在、中級以上の話者のほとんど（アイヌ言語学者も含む¹²）は、この草の根的なアイヌ語継承が可能な話者との1対1法による直接教授法で学んだ人たちである。民族の伝統文化や言語の背景にある歴史なども同時に学び、アイヌプリ（アイヌ風）の慣習やものの考え方も合わせて習得してきた。こうした総合的な学びが中級以上の話者の育成には必要であり、そのために最適な手段として、散発的ながら1対1法が採用されてきた。ここで言う中級とは、CEFRのB1¹³、B2¹⁴レベル（=自立した言語使用者）を指している〔丹菊2020：36-37〕。

母語話者が健在の消滅危機言語である琉球諸語では、「マスター・アプレンティス語学学習の取り組み（Master-Apprentice language learner initiative, MA）」と呼ばれる言語継承活動が実践されている。MAは先住民民族言語の世代間を超えた継承を促すために、90年代にカリフォルニア州の先住民居住地において始まったものである。現在、複数の消滅危機言語継承のために実践されている。MAの元来の学習モデルは1対1で、若者（アプレンティス<弟子>, A）とその地域のヘリテージランゲージ（継承言語）に堪能な長老（マスター<師匠>, M）がペアになり、日常生活を共に過ごしながら価値観を共有し、ゆったりとしたペースで語学学習を行う。（A）が2～3名になることもあるが、少数制で進められる〔トッピング2021〕。この手法は、話者（M）が存在する状況において可能なアプローチである¹⁵。

アイヌ語の中級以上の話者を輩出してきた、イマージョン活動を含む1対1法は、このMAと極めて親和性が高いと考えられる。しかし、今となつては、アイヌ語の母語話者は存在せず、在野の中級～上級話者も少ないため、話者（M）は、ほぼ言語学者に限定されてしまうだろう。であるならば、結局は、（A）は言語学系の大学院生が対象になりがちで、一般的な

手法にはなりえないと推察される。

丹菊 [2020] では、上述したように事業化されたアイヌ語関連事業が初級の再生産サイクルになっていると指摘しているが、これらを一概に否定しているわけではない。むしろ、「威信」を高めていくための営みであるとの見解も示している¹⁶。他方で、草の根的な1対1法は中級以上の話者を育成するための方法論として、事業化されたアイヌ語教育とは切り離して進めていく必要性を説いている。

つまり、事業化されたアイヌ語学習は広報的、デモンストレーションの側面が強く、言語の実用化は想定されておらず、中級以上の話者になるには、初級再生産サイクルに巻き込まれずに、学び続けることを勧めているのである。

一方で、筆者の調査地である北海道平取町では、事業化されたアイヌ語関連事業や文化事業、草の根的な会話実践（対面・オンライン）が絡まり合う形で進展しており、先行研究では論じられていない言語教育・復興活動のなかで新たな話者が誕生している。この話者の中には、丹菊 [2020] がいうところの中級に近い話者も含まれると筆者は考えている。

そこで、本稿では、アイヌ語学習の習熟度や運用レベルについて具体的に論じた貴重な論考である丹菊 [2020] を土台とし、まずは平取町でのアイヌ語継承活動やアイヌ語教育の歴史の変遷をたどる。加えて、現在行われているアイヌ文化財団の委託事業の一つである「伝承者育成事業（担い手事業：若手の文化伝承者を育成する事業）」をアイヌ語学習という視点から概観し、さらに草の根的に行われるイマージョンによる学習法（テ・アタアランギ）の取り組みなど、複数の公式・非公式の営みを検討する。平取町二風谷では、母語話者がいなくなった後、市販のテキストや公開済みの会話テープなどを使い、ほぼ独学でアイヌ語を習得した新たな話者が出現している。こうした人が講師となり、さらに若手の話者を生み出しつつある過程を紐解きながら、言語復興と言語イデオロギーとのかかわりを考察する。

言語イデオロギーとは、Silverstein [1979 : 193] によれば、「話者がその言語を使う際の導きとなり、最終的には言語に変化をもたらすようなパターンとして捉えたもの」であり、Irvine [1989 : 255] は、「社会と言語の関係について個々の文化がもっている理念の体系を指し、これらは倫理的・政治的利害関係」であるとしている。本稿が、言語イデオロギーに注目するのは、アイヌ語のようなマイノリティ言語の復興や学習評価を考察する上では、多数派側や行政との利害や権力関係はもちろんだが、アイヌ民族のアイデンティティを考える上でも大きな鍵になると思われるからである。

本研究の調査データは、筆者が2006年から平取町で行ってきた参与観察や資料調査、2021年10月、11月に実施した伝承者育成事業・二風谷アイヌ語教室・二風谷小学校での参与観察とインタビュー、また、2021年3月以降、オンラインで毎週参加しているテ・アタアランギの実践、関係者との私的なコミュニケーション等から集めたものである。

なお、筆者は長年博物館人類学を専門とし、博物館と地域社会との関係性に着目しながら、現代のアイヌ民族の理解につながる展示制作活動を行い、アクション・リサーチ研究を進めてきた。筆者のアイヌ語運用能力は初級の域を超えない程度であることも付記しておく。

2. 平取町におけるアイヌ語復興の歴史の変遷

2-1 平取町とアイヌ民族

日本の国勢調査では国籍を問う項目はあるが、民族を問われることはないため、民族別の人口統計は存在しないが、北海道庁ではアイヌ政策を進めるために昭和40年代から定期的に「アイヌ生活実態調査」をおこない、概ねの人口を把握してきた。2017年度の調査では、道内のアイヌ人口は13,118人と報告されている。しかし、ここには、アイヌの血を受け継いでいたとしても、自らがアイヌであると表明しない人は含まれていない [北

海道環境生活部 2017]。社会的差別が続いている中で出自を公表することを避けている人も多く、道外に居住している人も含まないため、実際のアイヌ人口はこの数倍以上と推定されている。

本稿で、取り上げる北海道平取町は、日高振興局内に位置し、「アイヌ生活実態調査」では、胆振総合振興局と並んで、アイヌにルーツを持つ人が最も多い地域である。町の全人口は、4,639人(2022年9月現在)¹⁷で、そのうちアイヌは2～3割を占めるといわれている。平取町内のなかでも、二風谷という集落は、人口約400人のうち7～8割がアイヌにルーツを持ち¹⁸、アイヌが和人(日本の多数派である大和民族)を上回る地区である。二風谷小学校も、アイヌにルーツをもつ児童が和人を上回っている道内唯一の小学校である。この集落には町立博物館をはじめ、アイヌ文化関連施設が集まっており、観光地としても周知されている。

平取町の主力産業である農業においては「びらとりトマト」と「びらとり和牛」をブランド化し、また、地域の特色あるアイヌ文化を今日に伝える伝承事業にも取り組んでいることを公式ホームページでアピールしている[平取町 2022]。近年は、施策推進法による交付金が道内外の市・町に交付されており、平取町もこれらを活用した文化事業・環境整備等が進められ、二風谷地区を中心に活性化している。

2-2 平取町におけるアイヌ語継承活動

～私塾から始まった「二風谷アイヌ語教室」～

先述したように1983年に萱野茂は「二風谷アイヌ語塾」という私塾を開き、地域の子どもたちにアイヌ語を教え始めた。当初は、保育所を開き、子どもたちにアイヌ語を教えようとしたが、役所側から反対されたため、二風谷保育所だけを開所した。1982年5月、萱野はカナダへ出かけ、視察したことを参考にしながら自宅敷地内に子ども図書館を建て、翌年から私塾を始めたのである¹⁹。のちに萱野の熱意に促された北海道ウタリ協会が北海道の横路孝弘知事に働きかけ、1987年、北海道の政策予算からアイヌ

語教育に対する補助金が支出されるようになり、私塾は「平取町二風谷アイヌ語教室」に改称され、大人の部と子どもの部がつくられた。当時のアイヌ語教室の主体は、北海道ウタリ協会で、下部組織であった平取支部（現、平取アイヌ協会）が、委託を受けて行う事業であった。1988年より平取町からも補助金が得られるようになり、現在は平取町の補助金で継続的に運営されている。80年代から現在までアイヌ語教室が間断なく続けられてきたのは、道内でも平取町だけである²⁰。

二風谷周辺では、昭和30年代ごろまでアイヌ語を母語とする古老は健在であった。当時を知る人々のなかには、自らはアイヌ語を話さなくとも、古老たちが集まって、アイヌ語で日常会話をし、口承文芸を語り合っていた様子を記憶にとどめている者もいる。教室開講当初の地元の受講生の中には、上述したような光景を懐かしみ、萱野茂講師が語る柔らかなアイヌ語や口承文芸を聴くことを楽しみにやって来た人も多かった。

90年代の講義記録〔萱野1989, 1990, 1993〕をみると、大人の部では、口承文芸を聴いて、その意味を理解し、朗読することや、生活民具や動植物の解説、踊りの体験、簡単なアイヌ語会話の練習、古老たちの昔話を聴くことなどが中心であった。教室は、アイヌ民族のかつての生活世界を共有する場となっており、文法から語学を学ぶような語学学校とは全く異なっていたことがわかる。

『二風谷アイヌ語教室（以下 広報紙）創刊号～89号』〔1988～2009〕の受講生インタビュー記事からは、受講生の年齢層が幅広いことも窺える。80年代後半、インターネットは人々にとって身近なものではなく、既存のメディアを通して萱野のことを知り、直接萱野から講義を受けたいと遠方から通ってくる非アイヌの受講生もいた。そうした受講生の多くは、アイヌ文化を学びアイヌ語を習得することに意欲的であった。それとは対照的に、地元の受講生は、差別的なまなざしから逃れ、安心してアイヌの世界観に浸り、昔を回顧しながら、一つでも kamuyyukar（神謡）や uwepeker（散文説話）を語れるようになればとの想いで学んでいる人が多かった。

1990年の広報紙（13号）の中で、地元の女性が、「近頃遠方からの熱心な受講生が多くなり、講義がレベルアップし怖いくらいの雰囲気が漂っており、地元の古老たちが気楽に足を運ぶことが困難になっている」と述べている。この語りには、熱心な非アイヌの受講生を排除しようという意図は全く含意していない。地元の古老たちにとって、アイヌ語教室という空間は、口承文芸や文化を通して緩やかにコミュニケーションができる場であり、抑圧され差別されてきた被傷した人たちの心の拠り所になっていたと考えられる。アイヌにルーツを持たない人たちが教室に加わることで、被傷した主体が信頼や承認を獲得し恒常性を維持することにもつながり、アイヌの人々の地位向上や地域社会の生活基盤を安定させる「レジリアンス²¹」を高めてゆく空間でもあったといえるだろう〔吉本 2014b〕。

現在大人の部は、2週間に1回2時間のペースで行われている。受講生は長年教室に通っている人が大半で、口承文芸を暗唱したり、日常会話の練習を続けている。こうした成果は、二風谷に復元されたチセ（家屋）の中で、語り部として観光客や地元の人々に披露され、好評を博している。コロナ禍以前は、子どもの部と大人の部が合同でアイヌ語劇を行い、道内各地で公演を行ったこともあった。このような教室の多様な実践は、アイヌ語の威信の向上につながっているといえるだろう。

一方、教室開設当初の子どもの部では、どのようなアイヌ語教育が進められていたのだろうか。萱野茂の助手であった本田優子（現：札幌大学教授）が子どもの部の講師を担当していた。広報紙には本田が手書きした「アイヌ語教室子どもの部〈活動日誌〉」という4コマ漫画が掲載され、学習中のエピソードが綴られている。年間の学習予定表も添えられており、当時は、2週間に一度地元の子供たちがあつまり、屋内外で学んでいたことがわかる。本田〔1997：26-27〕によれば、カリキュラムは①アイヌ語②自然の中の智恵③歌と踊りという3つを軸に計画された。アイヌ語教室でアイヌ語を学ぶことは、当然のように思えるが、子どもたちにとって最も苦手とするのがアイヌ語であった。アイヌ語が話されることが皆無に等しい

日常では、アイヌ語は英語よりもずっと遠い存在であり、一か月に2回程度教室に通ったからといってアイヌ語を話せるようになるほど簡単なものではなかった。少し文法的な説明をすると子どもたちはすぐに飽きてしまう。それゆえ、本田はトランプやかるたを利用したり、様々なゲームを考案することになった。また、野山に出かけて、山菜や草花について学習したり、地元のアイヌ文化保存会の人たちと伝統料理をつくることもあった。毎年2月に平取町で開催されるシシムカアイヌ文化祭では、子どもの部は、歌や踊りを披露してきた。このような本田の記述から、子どもたちは、身体を経験をとおして文化をメインに学んできたことが窺える。

本田が札幌へ移住して以降は、萱野茂の子息や地元の女性たちが子どもの部の講師を務めてきた。2012年度からは、学びを深めるため毎週1回1時間半行われるようになった²²。地域の自然と触れ合い、文化体験を重ねていく学習過程は、本田の方向性と同様である。その後、独学でアイヌ語を習得したS氏（1999年の結婚を機に二風谷に移住した和人男性：現、平取町教育委員会勤務）が、主たる講師となった。当初はS氏の妻M氏が子どもの部の講師をしており、S氏は助手として関わっていたが、次第にS氏が主導的になる。S氏一家がニュージーランドで先住民マオリの教育実践を視察・体験してきて以降、子どもの部は、週2回のペースで実施されるようになった。S氏は、マオリ語のみで保育を行っている「コハンガ・レオ（言語の巣）」²³と呼ばれる施設を見学し、子どもたちが沢山のマオリ語の歌を歌って、すぐに言葉を覚えてしまう様子に驚嘆し、アイヌ語教室でもアイヌ語の歌を導入した。そのほかにも、紙芝居や早口ことばなどを用いてアイヌ語を口に出す練習を重ねるようになり、以前と比較すれば、子どもの部は文化よりも「ことば」としてアイヌ語を学ぶ傾向が強まったといえるだろう。

80年代から2021年まで、子どもの部は二風谷小学校に通う子どもたちだけが参加する教室だった。平取町内には複数の小学校があるが、他の校区から通ってくる子どもは一人もいなかったという²⁴。S氏は、二風谷以外

の子どもたちにも教室に参加してもらいたいと考えてきた。そこで、2022年度から、週2回のうち1回は、二風谷生活館で開催し、もう1回は、和人が多数派となる平取本町地区の公共施設で開催するようになった。2022年7月現在、二風谷生活館のクラスに、別の集落に住む2歳の幼児が1名通ってくるようになったという²⁵。一方、平取本町のクラスは二風谷集落以外からの参加者は未だない。

とはいえ、40年近く続いてきたアイヌ語教室や、後述する学校教育の中での文化学習・語学学習の成果が、近年顕著にあらわれているように思われる。教室開設当初は、和人が多数派となる平取中学校へ通う時期になると、アイヌ語教室を辞めてしまう子が多かったが、いまでは高校に進学しても継続して参加する者もいる。また、かつてはアイヌ語教室に通っていることをアイヌ以外の友達に知られたくないという思いから、教室に行く時間になると「今日あれ行く」という隠語を使っていた子どもたちもいた。しかし、こうした子どもたちの中から、高校卒業後、大学に進学しアイヌ語やアイヌ文化を専門的に学ぶ者も出始めた。さらに近年は、大学卒業後、平取町に戻り文化関連施設で働きながら、アイヌ語復興の諸活動に参加し、アイヌ語講座の講師役を務めるようなケースも見られる。子どもたちの言語観や民族意識の変容は、地域コミュニティの環境や長年続けられてきたアイヌ語教室の実践、後述する学校教育のなかでの文化学習・言語学習との連関によるものであると推察される。

2-3 学校教育のなかでのアイヌ語学習 ～平取町立二風谷小学校の実践～

アイヌにルーツをもつ児童が多数派となる二風谷小学校では、1997年度からハララキ体験活動（アイヌ文化体験活動）とハララキ調査活動（アイヌ文化調査活動）が行われてきた。これらは、総合的な学習の時間を使って実践されてきた（体験活動は年間10時間、調査活動は年間30時間）。例えば、ハララキ体験活動では、地域の工芸家からアイヌ文様を学んで木彫

り制作をしたり、博物館学芸員とともに土器づくりを行うなど地元と関わりの深い文化体験を行っている。一方、ハララキ調査活動は、地域の自然、歴史、生活、文化などについて、児童自らの関心事から課題をみつけ、博物館や地域の人々のところに向いて調査し、模造紙に内容を纏めて考察を行う。その成果は、地域の方々を招いて「ハララキ集会」を開催し、グループでプレゼンテーションを行い公開してきた。さらに、2015年度からは、新たにアイヌ語学習も加わった。講師には平取町教育委員会からS氏が派遣され、現在は年間10時間の学習が行われている。授業の導入部では、S氏のギター伴奏に合わせて、児童・教職員全員がアイヌ語の歌を歌う。主要な学習内容は年度によって異なるが、動植物名、天候、色、数、狩猟・漁撈で使うアイヌ語や簡単な言い回しをゲームやすごろくなどを使いながら学ぶ。アイヌ関連の学習は、すべて総合的な学習の時間を用いて行われるため、授業時間数等は学校の裁量に任されている。よって学校の方針が変われば時間数の変更もあり得るだろう。町内の他の小学校でも、総合的な学習の時間を用いてアイヌ文化学習を行っているところもあるが、アイヌ語学習として実施しているのは、現在（2022年）二風谷小学校だけである²⁶。

二風谷小学校の前身は、同化政策を行うための「旧土人学校」だった[平取外八箇村戸長役場 1920:62-63, 小川 1992:198]。アイヌ語が貶められ「日本人化」を余儀なくされてきたその場所で、アイヌ語を学ぶことができるようになった意義は大きい。今のアイヌ語学習は、総合的な学習の時間を用いた教科外の教育活動ではあるが、子どもたち自身が学習指導要領の細かな規定に着目することは極めて少ないだろう。むしろ小学校時代、授業の中で、国語や外国語（英語）と同じようにアイヌ語を学んだ経験は、祖父母や親世代が自明視してきた（教育装置によって自明であると操作されてきた）言語ヒエラルキーを変容させる可能性を含んでいる。

3. 伝承者育成事業（担い手事業）におけるアイヌ語教育

2020年度から、アイヌ文化財団主催の「伝承者育成事業（担い手事業）」が平取町で始まった。この事業が始まる以前、二風谷でアイヌ語に関心を持つ若手は殆どいなかったという²⁷。しかし、本事業や地域おこし協力隊の参加者が移住してきたことで町内には若手が徐々に増えつつあり、地元でUターンする若者も見受けられる。こうした人々がアイヌ語に関心を持ち始め、小規模ながら、アイヌ語話者コミュニティが形成されている。本章では、若い文化の担い手を育成するための一事業である「伝承者育成事業」をアイヌ語学習という視座から再考する。

3-1 伝承者育成事業とは何か

1997年の文化振興法制定のもとで、アイヌ文化推進機構（現：アイヌ文化財団）が設立され、様々なアイヌ文化の振興・普及啓発に関する事業が進められてきた。担い手事業もアイヌ文化財団が展開する事業の一つで、文化伝承者が減少している今日、若い世代を対象に、アイヌ文化に関する知識や技能・技術を身につけてもらい、地域で活動する文化の担い手を3年間かけて育成しようとするものである。2008年から、北海道白老町にあった旧アイヌ民族博物館²⁸が受け入れ機関となり、第1期生の研修が始まった。2019年までに第4期生まで修了し、計17名の若手伝承者を輩出した²⁹。2020年度より、平取町が新たな受け入れ先となり、第5期生4名の研修が進められている³⁰ [吉本 2022]。

担い手事業を考察した先行研究は極めて少ない。若園 [2014] と上野 [2020] は、旧アイヌ民族博物館での研修カリキュラムの分析や修了生へのインタビューから、事業の課題と展望を述べている。上野 [2020] によれば、4期生のカリキュラム（案）には、自然（観察）・植物利用、工芸、芸能、身体技法、料理、精神文化、アイヌ語、歴史、法学、教材基礎（教材開発等）、道内外研修・普及啓発活動、総合（自習・講座のまとめ等）が含まれ、研修時間数でみるとアイヌ語、工芸、自然（観察）・植物利用

が上位を占めると述べている。一方で、本事業をアイヌ語の継承、復興という視点から考察した論考は無いに等しい。丹菊 [2020: 29-30] は、本事業を断片的に取り上げているが、基本的に工芸・芸能等の継承に力点を置いた事業であるとし、「アイヌ語」は初級講座と同等レベルであろうと推測している。

平取5期では、白老4期までと同様に、アイヌ文化を総合的に学ぶカリキュラムを組んでいるが、特にアイヌ語、工芸技術全般、地域（の人々）と文化振興事業を繋ぐマネジメント能力の向上に重点を置いている³¹。したがって、アイヌ語と工芸の総時間数に占める割合は、白老よりさらに高くなっている。広範に及ぶ研修科目を担当する講師陣は、地元の工芸家、平取アイヌ文化保存会の会員、大学教員、平取町教育委員会の職員、山岳ガイド、地元の古老など多岐に渡る。

3-2 伝承者育成事業におけるアイヌ語学習の実相

次に、(表1) 平取5期生の研修概要と時間数を示した。3年間の総研修時間数は、3886時間にのぼる³²。そのうち「アイヌ語」が最も多く1153時間(29.7%)を占める。次いで工芸が891時間(22.9%)である。他の研修科目は、「アイヌ語」を学ぶうえで、ほぼすべてにおいて相互に関連している。

例えば、「精神文化」では地域で行われる祭祀儀礼に参加し、アイヌ語による祈り詞も学ぶ。「共通」に含まれる生態観察では、毎月、近隣の野山へ出かけ、動植物の様相の変化を逐次観察する。口承文芸に登場する動植物を実際に観ることで、アイヌがそれらの特徴を仔細に捉えてアイヌ語名を名付けていること等を認識すれば、口承文芸の語りの意味をより深く理解できるようになる。

中級以上のアイヌ語話者を育成するための手法として注目されている1対1法で次世代へ言語を継承してきた実践者のなかには、「アイヌ語だけではなく、儀礼の実践や自民族の（地元の）歴史学習などを組み合わせて

いる」事例もあったようだ³³ [丹菊 2020:16]。だが、現代の日常生活の中で、地域の自然環境を知り尽くし、工芸から口承文芸、祭祀儀礼、歴史まで一人で実践できる人は皆無に近いと思われる。したがって、本事業では複数の専門家が講師となり、それぞれが持つ伝統的知識や技術、アイヌの世界観、歴史等を研修生に伝授している。こうした「アイヌ語」以外の研修科目は、アイヌ語の上達に必要な言語環境を提供していると解釈できるのではないだろうか。この事業は文化の担い手を育成することが最終目的で、アイヌ語のみを習得するためのものではないが、アイヌ語の習得という視座から捉えなおせば、他の科目の違った意義が見えてくる。

(表1) 担い手事業（平取）第5期の研修概要と時間数

| 研修科目 | 科目概要 | 時間数(H) | % |
|--------|--------------------------|--------|-------|
| 共通 | 年間を通した生態観察、道内外博物館等での資料実見 | 353 | 9.1% |
| 植物利用 | 工芸素材の採取加工、食用・薬用植物の加工方法等 | 224 | 5.8% |
| 工芸 | 木彫・編物・織物 | 891 | 22.9% |
| 身体技法 | 芸能・山猟・川魚等の技法 | 116 | 3.0% |
| 料理 | 食文化、儀礼の料理 | 34 | 0.9% |
| 精神文化 | 神事参加、祈詞の修得 | 173 | 4.5% |
| アイヌ語 | 文法・聴解・口承文芸・日常会話・教授法 | 1153 | 29.7% |
| 歴史 | 考古学・文献史 | 78 | 2.0% |
| 法学 | 国内法、海外の先住民政策 | 12 | 0.3% |
| ガイディング | 地域の自然環境の案内法 | 15 | 0.4% |
| 博物館学 | 博物館学入門 | 30 | 0.8% |
| 教材開発 | デジタル技術、模擬授業 | 387 | 10.0% |
| 専門コース | 各研修性の希望 | 420 | 10.8% |
| | (総時間数) | 3886 | |

出所：筆者作成（第5期担い手事業の実施主体である株式会社平取町アイヌ文化振興公社より提供された資料を基に作成。時間数は、2020～2021年度の実施済み時間数と2022年度実施予定時間数を集計した。）

では、実際に「アイヌ語」科目がどのように実践されているのかを見ていこう。講義の開始時と終了時には、通常男性の研修生が、祈り詞を唱え、

先祖やカムイ（神）に対して敬意を表し、アイヌ語を学び、継承することを誓う³⁴。こうした行為は、アイヌ従来の慣習に基づいたもので、単なる語学学習ではないことを喚起させる。また、講義の導入部では、毎回アイヌ語による1分間スピーチが行われ、研修生だけでなく、講師、事業スタッフ（本事業には研修生と同世代のアシスタントティーチャーが配置されている）にも課せられている。研修生だけにとどまらない実践は、アイヌ語を日常語として実用化し、話者コミュニティを拡大してゆく可能性が含まれている。

「アイヌ語」科目は、平取町教育委員会のS氏が主に担当し、教材の選定も行っている。事業開始前の研修生のアイヌ語レベルは、大学で基礎を習得した者から全くアイヌ語に触れたことがない初心者まで様々である。しかし、基本的に研修生全員が「アイヌ語とは何か」という入門レベルから学習を開始し、3年間に1100時間を超える膨大な時間をかけて、文法、聴解、日常会話、口承文芸の実演、教授法などを学んでいくため、初心者であっても、それなりの努力は必要だがハンデにはならない。教材には、沙流（平取地域）方言・千歳方言のテキストやアーカイブ資料などが使われている³⁵。筆者が調査した2021年11月には、『アコロ イタッAKORITAK アイヌ語テキスト1』（北海道ウタリ協会発行）の動画や、早稲田大学リポジトリにある田村すず子収録のアイヌ語音声資料などを用いて、会話や口承文芸の聞き起こしが行われていた。こうした聞き起こしの訓練は、一般の四年制大学におけるアイヌ語の講義、たとえ中級クラスであっても実践されることは少ないといえよう。

渡邊 [2018] は、首都圏の5大学（千葉大学・首都大学東京〈現、東京都立大学〉・東京外国語大学・早稲田大学・立正大学）におけるアイヌ語授業の内容を報告している。学部生対象の授業では、文法・会話の学習、口承文芸の暗唱・読解、アイヌの世界観、文化を理解することに主眼を置いている。一方、千葉大学では、学部生向けのアイヌ語授業の他に、言語学者の中川裕と大学院生等が集まるアイヌ語勉強会が行われている。ここ

では未刊の口承文芸を解説し、ローマ字表記と日本語訳をつけ、参加者全員で議論している。担い手事業の会話テープの聞き起こしは、刊行済みの音声資料が用いられることが多いものの、ローマ字表記や日本語訳について研修生、講師、事業関係スタッフも加わり議論する形式をとっており、千葉大学のアイヌ語勉強会に追隨する研修であると推察される³⁶。

5期生の最終年となる2022年度は、日常会話に重点が置かれ、教授法の実践も予定されている。5期の「アイヌ語」科目は、平取地方の沙流方言がメインとなっているため、他地域の方言（幌別、十勝、石狩方言等）は、白老の本事業修了生（ウポポイの職員）によって集中講義が行われている。加えて、年1回のアイヌ語弁論大会（イタカンロー）への出場も「アイヌ語」科目に課されている。筆者が調査を行った2021年11月は、イタカンローを間近に控え、口承文芸部門に出場する者は、kamuyyukar（神謡）などを暗唱し、弁論部門に出る者は、自身の経験談をアイヌ語で作文し語る訓練が続けられていた。大会前日には、文化関連施設に従事する地元の人々を前にリハーサルも行われた。その甲斐あって、研修生の一人が、弁論部門で最優秀賞を受賞した。

最優秀賞を受賞した研修生は、「大学時代にアイヌ語を学んでいたが、全然できなかった。担い手に入ってから、こんなにしゃべれるようになった。」と語った。「工芸家になることを目標にしているが、もちろんアイヌ語もしゃべれるようになった方がいいと思っているので、これからもアイヌ語の勉強は続けていくつもりだが…工芸との兼ね合いが難しい」ともいう。「いま、休日に観光ガイドのアルバイトをすることもありますが、アイヌ語ができなければ、他のガイドと同じだし、自分はアイヌなので、アイヌ語が出来た方が、本質が伝わるかなとも思う…」と語っている³⁷。アイヌ語を学び続けることの困難さを感じつつも、とりわけ「話す」ことを重視していることが窺える。加えて、文化を生業にする上でアイヌ語の必要性も認識しており、80～90年代アイヌ語教室大人の部に通った地元住民の言語観からは大きく変容していることも見て取れる。

4. 事業化されたアイヌ語学習と循環する草の根的なアイヌ語会話の取り組み

4-1 テ・アタアランギ ～草の根的なアイヌ語会話の実践～

平取町教育委員会の職員であるS氏は、担い手事業、二風谷アイヌ語教室子どもの部、小・中・高校でアイヌ語を指導するほかに、独自に草の根的な大人向けのアイヌ語会話学習会を3つ主宰している。これらは、すべて話すことに特化したイメージによる取り組みである。担い手事業研修生の一部も自主的に参加しており、アイヌ語学習の相乗効果を生みだしている。

- ① 対面で行うテ・アタアランギ（週2回）。
- ② Zoomを使ったテ・アタアランギ（週1回）。
- ③ Zoomを使ったアイヌ語会話会（フリートーク、週1回）。

①は、二風谷アイヌ語教室子どもの部が終わったあと、同じ場所で実施されている。子どもの部の助手を務めるK氏をはじめ、担い手事業の研修生、町内の文化関連施設で働く若手らが4～5名参加している。K氏は、二風谷出身で、2000年代初頭、子どもの部に通っていた経験がある。しかしながら①は平取町内で開催されているにも関わらず、地元の若手以外の参加者はいない。②はオンラインで実施され、居場所を問わないため、北海道内外および海外からの参加者もいる。担い手事業研修生、文化関連従事者、言語学者、アイヌ語に関心のある老若男女が、毎回20名ほど集まっている。ここにも二風谷アイヌ語教室子どもの部の出身者が数名いる。③もオンラインのため、どこからでも参加可能であるが、①と内容が重複することもあり、平取町内からの参加者はいない。常時3～4名の集まりである。

筆者は、2021年3月から②③に継続的に参加し、共にアイヌ語を学んできた。2021年11月の平取調査時には、①にも参加した。

こうした草の根的な会話中心の学習会は、事業化されたアイヌ語学習(担い手事業やアイヌ文化財団のアイヌ語講座等)と循環させることで、初級レベルの再生産システムに空隙を与え、中級話者を含む新たな話者(New Speaker)を生み出している。通常、新たな話者というのは、「家庭や地域で少数民族の言語に触れる機会がほとんど、あるいはまったくなく、代わりにイマージョンやバイリンガル教育プログラム、言語復興プロジェクト、あるいは成人の言語学習者として言語を習得する個人 [McCarty 2018]」のことであるが、ここではそうした状況を含みつつ、複数の公式・非公式の手法を用いて輩出された話者のことを指している。本章では、担い手事業とのかかわりから、アイヌ語の新たな話者が輩出される複合過程に注目するために、主に②のZoomによるテ・アタアランギ法の実践を取り上げる。

テ・アタアランギは、ニュージーランドの先住民マオリが1970年代後半以降の言語復興運動のなかで確立した言語教授法である。元来、数学者であったカレブ・ガターニョが編みだしたサイレント・ウェイ(The Silent Way)と呼ばれる、色付きのクイズネア棒を使うイマージョン学習法をベースとし、マオリの伝統的世界観や文化を組み込み、作りだされたものである。マオリ語に触れる機会がなかった大人を対象とし、誰もが流暢にマオリ語で日常会話ができるようになることを目指してきた。レッスン中、英語は一切使わず、マオリ語のみで進められ、学習者はペンも紙も持つことができない。互いのペースを尊重し、全員がマスターするまで先に進まないなど、学習者の細かな心の動きにまで対応することが求められる。テ・アタアランギは、大人世代のマオリ語運用能力を高めただけでなく、マオリの世界観や文化を継承し、マオリコミュニティの再生にも繋がった。都市部では新たなマオリコミュニティが誕生するなど、マオリの紐帯を強化することにも効果を発揮している [岡崎 2015]³⁸。

S氏は、2013年にニュージーランドのマオリと交流するプログラム「ア

オテアロア・アイヌモシリ交流プログラム³⁹」に参加し、テ・アタアランギ法を学んできた。33日間の滞在中には、マオリ語のみで教育が行われている学校や保育施設なども見学し、衰退の一途を辿っていたマオリ語が復興を遂げたことに大きな刺激を受けた。帰国後、マオリ関係者から助言を得ながら、平取町二風谷で対面によるテ・アタアランギを開始したが、6～7年は首尾よく進めることができなかった。2020年より平取町で担い手事業が開始されることになり、アイヌ語に関心を持つ若者が増え、テ・アタアランギは新たな展開をみせている⁴⁰。

Zoomによるテ・アタアランギを行う一つのきっかけになったのは、平取町主催の「大地連携ワークショップ」だった。全国の大学生らを対象に、アイヌ文化を体験し、地域振興策などを考えるこのワークショップが、コロナの影響によりZoomと対面のハイブリッド方式で開催されることになった。ワークショップには、テ・アタアランギも含まれていたため、S氏はZoomのブレイクアウトルームの部屋分けツールを使って、体験学習をすすめることにした。部屋にファシリテータ役の先生を配置し実践したところ、対面のテ・アタアランギに近い形式で進めることができた。この経験を基に、2021年3月以降、②のZoomによる会を立ち上げた。参加者の入れ替わりは若干あるものの、1年半以上続けられている。

4-2 特定の場や属性を超える話者コミュニティの出現

～Zoomによるアイヌ語テ・アタアランギ～

マオリ語テ・アタアランギと同様に、②でも一定のルールがあり、初回のレッスン時に参加者全員に共有された。

- 1) 他の言語を使わない。(アイヌ語だけを使う)

oya itak somo a=ye yak pirka (aynu itak patek a=ye kusu ne)

- 2) 他人の慣習や信仰を尊重する。

mosma kur kor puri a=eoripak yak pirka

3) 人を焦らせない。

iteki mosma kur imontapire yan

4) 自分の番が来た時にだけ話す。

yaykata a=ye hi patek a=ye yak pirka

5) お互いに謙虚であること。(一人ひとりが経験する様々な感情に共感する)

ukoramuriten=an yak pirka

6) たくさん間違えよう。(間違いを恐れず、自分の番にはどんどん発言する)

poronno ehosi no a=ye ro

アイヌ語のテ・アタアランギのルールは、マオリ語テ・アタアランギの教育理念をほぼ踏襲しているが、アイヌ語でいうオリパッ(相手に対して敬意を持ち、慎み深く控え目に行儀よくふるまう)という精神と通底しているといえるだろう。

開講時に、全員が短い自己紹介をしたものの、初対面の人も多く、当初はZoomゆえの緊張感もあったように思う。そこで、レッスン前に日本語による5分程度の日常会話の時間が設けられるようになった。その後、「学びの前の祈り詞」を、男性の参加者(担い手研修生)が唱える。祈り詞は、担い手事業の「アイヌ語」科目の開始時に唱えられるものと同じである(脚注34参照)。続いて「aynu itak patek a=ye ro (アイヌ語だけしゃべろう)」(=始まりの合図)を全員で数回繰り返すと、アイヌ語だけの空間となり、1時間強のイメージ学習が始まる。レッスンを終える際は、男性が再び「学びの後の祈り詞」を唱え、全員で「urameturente=an ((我々は)心をそろえる)」(=終わりの合図)を数回繰り返すと、アイヌ語での会話が終了し、日本語が使えるようになる。

レッスン内容は、挨拶、色、数の数え方など、日常生活で使われる会話を中心に、S氏が毎回題材を考えているが、言語学者の協力のもと試行錯誤が重ねられている。レッスン時は、S氏が、ニラシと呼ばれる色付きの棒や、ぬいぐるみ、身振り、手振りを使って例文をアイヌ語のみで解説する。そ

の後、参加者は割り振られた部屋（ブレイクアウトルーム）で、ファシリテータの指示に従い、例文の会話練習を繰り返し行う。毎回、新出単語は10語以下だが、1時間ほどの間に、その回の例文・単語はスムーズに言えるようになっている。当初ファシリテータは、テ・アタアランギに慣れている参加者が担当していたが、次第に参加者全員が持ち回りで担当するようになった。レッスン中は、参加者の多様な属性や社会関係が曖昧になり、全員がアイヌ語学習者であることが前面化する。Zoomを使うことで、特定の場所やその他の属性を超えたところで、新たなアイヌ語話者コミュニティが誕生しているといえるだろう。

担い手研修生にとって、テ・アタアランギへの参加は強制ではない。しかし、自主参加することで、アイヌ語の運用能力はより高まっているように見受けられる。3章で述べたように担い手事業では、膨大な時間をかけて「アイヌ語」や関連科目を学んでいる。これらの研修科目のほとんどは、イメージによる学びではないため、テ・アタアランギへの自主参加は、会話力の向上につながっている。筆者の2021年11月のフィールド調査時（研修1年半）でさえ、テ・アタアランギに参加していた担い手研修生は身近な話題や、標準的な言い回しであれば、難なく理解し、筋の通った文章をつくることができた。

現段階では、アイヌ語テ・アタアランギ法は、試行錯誤の中で進められており、改良の余地はあるものの、事業化されたアイヌ語学習と草の根的な手法を複数組み合わせることで、初級の域を超える新たな話者を生み出していることは確かだろう。一方で、テ・アタアランギの参加者のなかには、文法や文化的背景を学んだ経験のない人も含まれており、テ・アタアランギ法のみで、「アイヌ語」会話がどこまで上達するのか、長期的に検証していく必要もあるだろう。

なお、現在、対面によるテ・アタアランギ①は、参加者のほとんどが初級の域を超えており、毎回一つのお題が出され、それについて順番にアイヌ語で話す形式がとられている⁴¹。③のZoomによるフリートークも同様

のテーマが提示されるが、分からない単語をネットで調べながら、聞く・話すことが可能である。

5. 新たな話者たちをめぐる言語イデオロギーとアイヌ語復興

本章では、平取町二風谷を中心に、新たなアイヌ語話者たちの語りや言語を取り巻く社会状況を分析し、そこから見えてくる言語イデオロギーとアイヌ語復興との関係性を考察する。

木村護郎クリストフによれば、言語イデオロギーは固定的なものではないという。言語社会において持続・反復される言語行動（メタ言語言説を含む）によって、たえず（再）構成され、また変容していく流動的なものである。こうした言語イデオロギーに媒介されて、新たな言語使用に結びつく場合もあれば、ある言語使用が違った言語イデオロギーを生み出し、そこから社会状況に影響を及ぼすような場合もある [木村 2011]。

ここでは、木村 [2011] の指摘に留意しながら、新たなアイヌ語話者たちの語りから明らかになる社会状況の変遷、言語イデオロギー、言語使用の変化を検討してゆく。

S氏がアイヌ語学習者からアイヌ語講師へと本格的に移行するのは平取町職員になった2015年ごろのことだろう。とはいうものの、S氏は講師でありつつも、学習者とともに学び続け、より熟達した話者へと進展する只中にある学習者であるともいえる。

20代のころバイクで日本一周の旅の途中に平取町二風谷に立ち寄り、のちに妻となるM氏と出会った。1999年に娘が誕生したことを機に二風谷に移住し、当初は生計を立てるために造林業に従事した。S氏は、娘とともに、萱野茂が講師を務めていた「親と子のアイヌ語講座（アイヌ文化推進機構主催）」に通い始めたが、その後、萱野が逝去したため、市販のアイヌ語テキストやCDなどを使い、ほぼ独学でアイヌ語学習を進め、二風谷アイヌ語教室子どもの部の講師を引き受けるようになってゆく。S氏に

とって、ニュージーランドのマオリと交流した2013年は転機の年だった。同年、アイヌ語研究者・中川裕著の『ニューエクスプレスアイヌ語』（白水社）に付される音声データ（CD）の録音をS氏一家が担当することになった。また、2014年4月からはアイヌ文化財団の一事業である「アイヌ語ラジオ講座」の講師を1年間担当し、さらに、2015年には、平取町職員として中途採用され、町立二風谷アイヌ文化博物館に学芸員補として着任した。同年、二風谷小学校でアイヌ語学習が始まったため、アイヌ語講師としての業務も兼務してきたが、2020年度からは、平取町教育委員会生涯学習課に異動し、町内の学校のアイヌ語・文化学習を専門に担当し、アイヌ語教育の現状について国内外へ発信する機会も増えている。S氏は母語話者がいなくなって以降、独学でアイヌ語を習得した数少ない講師だが、公的なアイヌ語学習を主導し、且つ草の根的な活動を学習者とともに行うことで、アイヌ語の運用能力を高め続けている。1対1法ではない手法で熟達した話者になった学習者の一人といえる。

筆者は、S氏が平取町職員になる以前の2014年2月にインタビューを行った。当時のS氏は、二風谷アイヌ語教室の講師として次のように語っている。

僕は、ここ（二風谷）に来て15年くらいなんですけど、ここはアイヌがマジョリティなんで、僕はここで差別を感じれないんですよね。…僕が鈍感なのかもしれないけど、ほとんど（差別を）感じたことはないし、またアイヌの人を差別して商売が成り立つ状況にないと思うんですよね。この平取全体が。そういうことで困ったことはないんですよね。いま、子どもの教室に来てるのが、二風谷の子たちだけなんです。よその地域からも来てもらうことが課題かなと思ってます。

確かに二風谷という集落は、アイヌが多数派であるため、他地域と比較すれば集落内では、差別を受けることは少なかったと聞く。しかし、先にも述べたように、当時、アイヌ語教室に通っていた児童らは、教室に行く

時間になると「あれ行く？」という隠語で表現するような状況があったことも事実である。子どもたちは、アイヌ語教室や学校教育の中での文化学習を通して、その楽しさを知りつつも、日常生活では、周囲の大人たちがアイヌ語使用に積極的でないことを肌で感じとっていたのかもしれない。ここにも、明治政府が展開した同化政策のイデオロギーの影響が残存していたということだろう。だが、今こうした子どもたちが成人し、S氏と共にアイヌ語復興の担い手になっている。

現在、子どもの部の助手を務めるKさんは、二風谷小学校（教室子どもの部）の卒業生であり、担い手事業の事業スタッフ（アシスタント・ティーチャー）を務め、さらには、アイヌ文化財団主催のアイヌ語入門講座の講師でもある。それに加えて、対面とZoomのテ・アタアランギにも参加しており、平日は朝から晩まで、アイヌ語やアイヌ文化に浸る生活を続け、地元に貢献したいと語る。

S氏が牽引してきた新たな話者たちは、仲間内では、「irankarapte（こんにちは）」「suy unukar=an ro（またお会いしましょう。さようなら）」というアイヌ語を日常的な挨拶として使っている。担い手研修生の挨拶では、これが当たり前になっている。また、アイヌ語テ・アタアランギ①②③でも、こうした言い回しは日常的に使用されている。

「irankarapte」は本来「ご挨拶申し上げます」という問投詞で、男性が、家に通されて席についてから、一定の作法をもって挨拶する際に使用されてきた、きちんとした挨拶語である。沙流方言では、いつも会っている友人などに道で出会ったときに「こんにちは」というような軽い挨拶語としては使用されていなかった。しかし、1980年代終わりごろから、アイヌ語の使い方も変わってきたようで、1990年代では、軽い「こんにちは」のような挨拶として使用されるようになったと『アイヌ語沙流方言辞典』田村すず子著[1996]では述べられている。近年、アイヌ文化復興のために、国・北海道・民間団体が連携し「イランカラッテキャンペーン」を展開していることも、この言葉の使用形態を大きく変容させた一要因といえるだろう。

しかしながら、文化関連施設の従事者はスローガンとして「irankarapte」を用いることはあるが、日常言語（生活）の中に浸透させようという意図は感じられない。そうしたなかで、若手の話者たちが、仲間内とはいえ日常で使用し始めたことは、行政が想定してきた企図を超える言語使用の局面へと移行しているといえるのではないだろうか。

平取町内では、未だアイヌ語と日本語の二言語表記は二風谷の一部を除けば、ほとんどみられない。二風谷にはアイヌ文化を象徴する復元チセ(家屋)があり、工芸家が実演を行うなど、可視的なアイヌ文化が溢れている。だが、二風谷を一步出れば、アイヌ文様やアイヌ語の看板など言語的景観は見当たらない(平取町内には文化的な自然景観は点在しているが)。平取町には、ピラッキーという「ゆるキャラ」が存在するが、特産品の「びらとりトマト」をイメージしており、アイヌ文様やアイヌ語は使われていない。

町は公式ホームページでもアピールしているように、アイヌ文化振興に長年力を入れてきた。文化振興・普及・啓発には多額の資金が投じられ、様々なプロジェクトが進行中である。しかし、町自体は言語の実用化に向けた具体策は示していない。こうした状況は、施策推進法において、アイヌ語は「アイヌ文化」の一つとされ、国の言語は日本語のみであるという自明性に依拠していると推察される。工芸や舞踊などと同様に文化振興は行えるが、一言語としての政策は展開できないのが実情なのだろう。

とはいえ、町内での文化振興事業と草の根的なアイヌ語復興活動との相乗効果によってアイヌ語に関心を持つ若手が増え、小規模ながら、アイヌ語話者コミュニティが形成されていることにS氏は希望を見出しているように思われる。一方で、先述したように、2022年4月から、平取本町でもアイヌ語教室子どもの部を開講したが、二風谷以外からの参加者はなく、平取本町と二風谷との温度差も感じられる。

S氏は、「理想と現実のギャップを埋めていくのは、自分のような立場にいる者の役目であり、外からの声も必要だ」と語る。

いまの学校現場で可能な範囲のアイヌ語学習を地道に行いつつ、事業化

されたアイヌ語教室や担い手事業を活用し、草の根的に特定の地域や民族出自を超えた話者コミュニティの人々とも連帯することで、新たな話者たちが、将来的に自らの力で行政の方向性を転換し、言語使用形態を変容させていくかもしれない。また、話者たちの多くが20代30代であり、今後家庭を築き、私的領域の中で自身の子どもたちにアイヌ語を継承していくことも期待できるだろう。「これからは工芸、舞踊だけでなく、アイヌ語もできないとダメだと思う」という若手の語りにその可能性を見出すことができる。

おわりに

97年の文化振興法成立以降、アイヌ文化推進機構（現：アイヌ文化財団）の設立によって、複数のアイヌ語関連事業が実施されてきたが、先行研究では、これらが初級の学習者を再生産する閉じたエコシステムになっているとしている。確かに、アイヌ語・口承文芸は、伝承すべき「文化」の一つであり、事業化された講座の中で学び、それらを和人に披露し、伝統文化の威信を高めていくものであることは否めない。しかしながら、法律制定前から行われてきたアイヌの人々自身によるアイヌ語継承活動と、公的なアイヌ語関連事業との連鎖が、民族アイデンティティを再構築し、レジリアンスを高める場になってきた。今その効果が、次世代へと引き継がれ、アイヌ語・口承文芸を学び「覚える・見せる」から「話す」という言語使用形態へ移行しつつあり、決して閉じた初級再生産システムとはいえないだろう。

一方で、アイヌ文化財団の事業は、国と北海道からの予算によって展開されており、施策推進法などの法律やアイヌ語を取り巻く多数派のイデオロギーから完全に自由になることはできないが、今日の草の根的なアイヌ語復興活動は、これまでのアイヌ語関連事業の成果を新たなフェーズへと引き上げる一助になっているのではないだろうか。

2020年度より、平取町で行われている担い手事業では、伝統文化の基礎を学びつつも、現在、地域で実際に行われている現在進行形の文化も習得している。工芸は伝統技術を学びながら、アート化した作品もつくりだす。そうした視点で、アイヌ語継承を考えた場合、先行研究がいう1対1法は、母語話者（それに近い話者）から直接学ぶ手法であり、現代において、当時と同様にアイヌ語を変化させることなく継承することは容易ではないだろう。言語使用の変容や、新語の創造、方言差をいかに継承していくべきか、純粹主義に陥ることなく、新たな話者たちが話し続けられる環境を整えていくことが必要だろう。

アイヌ語のテ・アタランギ法は、マオリの言語復興の手法をルーツとしながらも、現代アイヌの言語復興運動の中から生み出されたイマージョン法であるが、過去のアイヌ語話者のデータに即して、いかに言語を復興させるのか、アイヌ語復興の方向性は、若い話者たちが将来どのようなアイヌ社会を想定しているのかによって、学習法や教授法も異なってくるはずである。

アイヌ文化財団は「アイヌ語教育基盤整備事業」を設定し、アイヌ語の教授法や学習法の検討を行っており、その必要性はいうまでもないが、こうした事業とは別の場において、アイヌ語講師や学習者を含め、学際領域的に言語イデオロギーとアイヌ語復興についてより深く議論していくことも必要だろう。

謝辞

2021年度をもって定年退職された教育学者である高橋寛人先生とは、私が都市社会文化研究科博士課程に社会人入学した2009年以来のお付き合いになります。アイヌ民族の博物館展示のあり方を主な研究課題にしていた私は中西新太郎先生のゼミに所属していましたが、高橋先生からは論文講読演習などを1対1でご指導いただきました。今思い返せば、とても贅沢

な時間を過ごしていたのだと感じます。中西先生は私が学位を取得した直後に定年退職されたため、高橋先生が代わって客員研究員の受け入れを快く引き受けて下さったお陰で、私は今日まで研究に専念することができました。教育や研究の悩みを打ち明けるといつも有益な助言を下さり、前に進むことができたように思います。改めて感謝の意を表したいと存じます。これからもお元気で、益々ご活躍されることをお祈りしております。

なお、本稿は、公益財団法人横浜学術教育振興財団、2021年度・研究助成「アイヌ文化の伝承者育成事業」が継承する「アイヌ文化」とは何か—アイヌ施策の再検討に向けて」（研究代表 吉本裕子）の研究成果の一部であり、助成を頂いたことに感謝いたします。また、本研究を進めるにあたり、伝承者育成事業の研修生・修了生・関係者の方々からは貴重なご意見を頂きました。アイヌ語学習の祈り詞の翻訳確認については、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授の北原モコットウナシ氏にご協力を賜りました。テ・アタアランギでは学びの場を頂き、参加者の皆様と共にアイヌ語で会話できることを嬉しく思っています。併せて感謝申し上げます。

註

¹ 先住権には、先住民族自らが伝統的に所有・占有してきた土地での民族自決権や自治権、土地権、自然資源に関する権利（山林や河川において採取・漁撈・狩猟（生活）する権利）などが含まれる。

² 2019年アイヌ施策推進法成立時に廃止。

³ 2018年、「一般財団法人アイヌ民族博物館」と「公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構」が合併し、「公益財団法人アイヌ民族文化財団」に名称を改めた。

⁴ [公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2018] による。

⁵ 丹菊 [2020：11] によれば、文化振興法制定以降、アイヌ語の振興事業等は行われているものの、積極的なアイヌ語復興策はとられておらず、話者の高齢化が進み、全体として話者人口は減り続けており、現在の話者人口を数人～数十人と推定している。丹菊の個人的な実感としながらも、基本的な会話ができ、さまざまな話題をアイヌ語で語れる話者は少なくとも数人は存在するが、重要なことは話者の人数よりも「流ちょうな話者」が既に存在しないことだと強調

している。80年代に言語学者に協力した話者は、ほぼ完全な「バイリンガル」でアイヌ語のほぼすべてを知っていたが、現在の話者は、80年代と比較すれば明らかに語彙が少なくなっていると述べている。

⁶ CEFRは、外国語学習の習熟度や運用能力を測る国際的な指標である。文部科学省でも、民間による英語の各資格・検定試験とCEFRとの対照表を参考資料として公開している。<https://www.mext.go.jp/content/000025257.pdf> 2022年8月19日閲覧。

⁷ A1=「具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。」ブリティッシュ・カウンシル・ケンブリッジ大学英語検定機構による翻訳。以下同様。

⁸ A2=「ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。」

⁹ 丹菊は、指導者育成事業の講師を担当する中川裕 [2013] や佐藤知己 [2012] を引用しながら時間数や内容の不足を論じている。指導者育成事業は2年を1期とし、年3回3日間、計18日間の合宿形式である。近年は、年に3日間のフォローアップ講座が加わったが、それを含めても指導者育成を目指す時間数としては極めて少ない。

¹⁰ [公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2018]

¹¹ 北海道庁がアイヌ民族を対象に実施している「アイヌ生活実態調査」の中で「今後、アイヌ語を覚えたいと思いますか」と問う項目がある [北海道環境生活部 2017]。話したいではなく覚えたいとしている点からも、行政がアイヌ語の日常的使用を想定していないことが窺える。

¹² 口承文芸を語ることができた古老らから聞き取り調査を行っていた言語学者も、必然的に1対1法によってアイヌ語を習得した人たちである。また、現在二風谷アイヌ語教室で講師を務める木幡サチ子氏は、幼少期、祖父母に預けられて数年間アイヌ語で育てられたが、晩年になり萱野茂との1対1の再訓練によってアイヌ語を再習得した人の一人である [丹菊2020: 15]。

¹³ B1=「仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。」ブリティッシュ・カウンシル・ケンブリッジ大学英語検定機構による翻訳。

以下同様。

¹⁴ B2 = 「自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで、普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。」。

¹⁵ MAの活動をリサーチしているロンドン大学東洋アフリカ研究学院ズラズリ美穂氏による「世代間の記憶とことばをつなぐ」プロジェクトホームページ <https://www.mai-ryukyus.com/map> も参照。2022年9月5日閲覧。

¹⁶ 言語学者の中川裕は、2009年のアイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会で少数言語の維持や復興に関して重要なものとして、①地位 (status) ②核 (corpus) ③威信 (prestige) の3つを挙げている。これらは、ハラルト・ハールマン『言語生態学』(1985) に依拠している。①は、公的に設定される言語の社会的地位であり、公用語、学校教育での教育対象言語に指定することなど。②は、その言語の利用可能な資源のことであり、辞書、テキスト、教科書、参考書、音声資料、映像資料、新語の創造、正書法の整備など。③は、その言語の社会的なイメージであり、①の地位とも密接に関係するが、それとは区別される。「冬のソナタ」をきっかけに韓流ブームが起り、韓国語 (ハングル) 学習者が増えた事例を挙げている [中川 2009]。現在の日本政府のアイヌ語政策はこうした考え方が反映され、②③に重点が置かれている。

¹⁷ [平取町2022] 平取町ホームページ参照。 <http://www.town.biratori.hokkaido.jp/> 2022年9月7日閲覧。

¹⁸ 2002年平取町「地区別ウタリ世帯数及びウタリ人口数」資料参照。ウタリとはアイヌ語で同胞を意味する。町内の地区別アイヌ人口を示す資料は少なく、地元の人々の語りを合わせて参照した。

¹⁹ 『二風谷アイヌ語教室広報紙』1988年 第2号

²⁰ 『二風谷アイヌ語教室広報紙』1988年創刊号・第2号及び、令和3年「伝承者育成事業」公開講座K.M氏による『二風谷における子どもアイヌ語教室のあゆみ』2021年10月10日より。

²¹ レジリエンスという概念は、多義的である。医学では「病気に陥らせる困難な状況、ひいては病気そのものを跳ね返す復元力、回復力」と解されてきた。医療人類学の分野でも発展的に用いられ、不可避の出来事によって傷つくことを余儀なくされた個人、家族、共同体が、そこからの能動的な働きかけによって、それらを跳ね返し・回復していく「力動的過程」を意味し、単に元の状態へ回復するだけでなく、新たな状態へと変容する過程に注目する。また「文化的レジリエンス」という概念も登場しており、先住民個々人やコミュニティが、その逆境を克服するために民族固有の文化や伝統的生活様式を利用するための理論として注目されている [加藤編 2012]。

²² アイヌ文化推進機構主催：平成24年度アイヌ文化普及啓発セミナー「二風谷アイヌ語教室—大人の部・子どもの部の取り組み」報告者 S氏 2012年8月8日 於：アイヌ文化交流センター。

²³ コハンガ・レオ（言語の巣）については〔野崎 2021〕参照。

²⁴ 令和3年「伝承者育成事業」公開講座K.M氏『二風谷における子どもアイヌ語教室のあゆみ』2021年10月10日より。

²⁵ アイヌ語教室子どもの部の助手を務めるK氏からの情報による（2022年7月13日）

²⁶ 筆者は2011年の二風谷小学校での「ハララキ集会」を見学し、その後2021年11月19日にS氏とともにアイヌ語学習に参加。その際、学校関係者及びS氏から聞き取りを行った。平取町立二風谷小学校ホームページ「本校の特色ある活動」<https://www11.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=0110018&frame=frm5ba48b33da02d>も合わせて参照 2022年9月7日閲覧。

²⁷ S氏の聞き取り調査（2014年2月17日）より。

²⁸ 旧アイヌ民族博物館は、2018年公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構と合併し、公益財団法人アイヌ民族文化財団となった。当地には2020年民族共生象徴空間：愛称ウポポイが開業した。

²⁹ 1～3期生修了生は〔公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2018〕で確認。4期修了生は、アイヌ文化財団の担当者に確認した（2022年4月28日）。

³⁰ 平取での担い手事業に関するフィールド調査は、2021年10月、11月に実施した。本稿は、2021年度の調査データに基づいている。研修生の出身地は、北海道浦河町1名、神戸市1名、平取町2名。うち、アイヌにルーツを持つ者は3名である。

³¹ 平取第5期生募集要項に記載の研修内容に依る。白老1～4期と異なるのは、最終年度に、研修生個々人が希望する分野に特化したカリキュラムを導入し、より専門性を高めることをねらっている点である。

³² 平取5期は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年6月下旬より、事業が開始された。よって、白老と比較すると総研修時間数は少ない。上野〔2020〕によれば、白老4期の総研修時間数は、4830時間。そのうちアイヌ語は1011時間（20.9%）。

³³ 旭川で1対1法によって話者からアイヌ語を習得したアイヌ語教育者・太田満氏の教育実践の事例である。

³⁴ アイヌ語学習の前後に唱えられる祈り詞（北原モコットウナシ氏 作成）

yaypakasnu etoko ta 学びの前に

ekasi nomi kur（先祖が祀った方々は）

uatte nankor（数多いらっしゃることでしょう）

tapan pe neno（このように）

ku=iki yakka（私がしても）

nep irara (何ら悪戯を)
ku=ki rok katu (しているようす)
somo tapan na (ではありません)
teeta ekasi (昔の先祖が)
eypakasnu p (教えたものである)
a=kor a itak (私たちの言葉)
a=kor a puri (私たちの習慣)
ku=pasere kane (私が尊重しながら)
ku=eoripak kane (私が敬いながら)
an koraci no (ありのままに)
en=os ek kur (私の後から来る者に)
ku=kore kusu ne na (私は引き継ぎます)
pirka cipakasnu (良い教え)
en=ekarkar (私に与えてください)

yaypakasnu okake ta 学びの後に
ekasi nomi kur (先祖が祀った)
utarorkehe (方々の)
kor a punki (加護の)
kusukeraypo (おかげで)
pirka sukup (良い成長を)
ku=ki siri ne na (私がしたのですよ)
iyayraykere (ありがとうございます)
ionkamire (感謝いたします)

³⁵ 以下は、2020年～2021年11月までに「アイヌ語」科目で実際に使用されたテキストである。山丸賢雄著『私家版テキスト』、中川裕著『ニューエクスプレス アイヌ語』(2013年、白水社)、中川裕・中本ムツ子著『CDエクスプレス アイヌ語』(2004年、白水社)、中川裕・中本ムツ子著『カムイユカラを聞いてアイヌ語を学ぶ CD付』(2014年、白水社)、佐藤知己著『アイヌ語文法の基礎』(2008年、大学書林) など。

³⁶ 2021年11月18日、担い手事業「アイヌ語」会話テープの聞き起こしに参加し

た筆者の経験を元にした私見である。

³⁷ 担い手研修生O氏 2021年11月14日聞き取りより。

³⁸ Te Ataarangi. Methodology. <https://www.teataarangi.org.nz/about/methodology> も参照。

³⁹ このプログラムは、アイヌとマオリとの交流を促進し、マオリの様々な活動を学ぶことで、次世代のアイヌのリーダー育成に寄与することを目的とした。公的な助成金に一切頼らず、実行委員会を立ち上げ、プログラムの主旨に賛同する人々から寄付を募り実施された。期間：2013年1月21日～2月22日計33日間
研修先：ニュージーランド北島全域（14都市、38箇所）。研修生7名、実行委員からの随行2名、通訳3名、記録係2名、写真家1名が参加 [アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告集作成委員会 2013]。

⁴⁰ 2021年11月17日、S氏からの聞き取りによる。

⁴¹ 筆者が対面で参加した際のテーマは「最近読んだ本について」（2021年11月15日）、「好きな飲み物について」（2021年11月18日）であった。

引用・参考文献

- アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告集作成委員会 2013『アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書』スペース・オルタ。
- 上野昌之 2014『アイヌ民族の言語復興と歴史教育の研究——教育から考える先住民族とエンパワーメント』風間書房。
- 上野昌之 2012「アイヌ民族とアイヌ語学習：先住民族の言語権の視点から」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』12：231-243。
- 上野昌之 2020「アイヌ文化伝承者育成事業の実践例と課題の研究」『東京未来大学研究紀要』14：153-161。
- 岡崎享恭 2015「テ・アタアランギとマオリ語復興」『渾沌：近畿大学大学院総合文化研究科紀要（Chaos）』12：65-48。
- 小川正人 1992「北海道旧土人保護法」・「旧土人児童教育規程」下のアイヌ学校」『北海道大学教育学部紀要』58：197-266。
- 加藤敏編著 2012『レジリアンス・文化・創造』金原出版。
- 萱野志朗編 1989『やさしいアイヌ語（1）昭和62年度講義録』平取町二風谷アイヌ語教室。
- 萱野志朗編 1990『やさしいアイヌ語（2）昭和63年度講義録』平取町二風谷アイヌ語教室。
- 萱野志朗編 1993『やさしいアイヌ語（3）平成元年度講義録』平取町二風谷アイヌ語教室。

- 北原次郎太モコットウナシ 2012 「aynu itah eyaycaakasno : tani an=kii pe · tani orowano an=kii kun pe (アイヌ語学習：現状と課題)」『ことばと社会』14：276-304.
- 木村護郎クリストフ 2011 「言語復興における言語イデオロギーに注目する」『琉球諸語記録保存の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp. 84-99.
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2018 『公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構活動史20年のあゆみ』.
- 佐藤慎司・村田晶子 2018 「言語・コミュニケーション教育における人類学・社会的アプローチの意義」佐藤慎司・村田晶子編『人類学・社会的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育——言語と言語教育イデオロギー』三元社 pp. 3-24.
- 佐藤知己 2012 「アイヌ語の現状と復興」『言語研究』142：29-44.
- 関根健司 2016 「アイヌ語の可能性」『北海道自治研究』568：20-21.
- 関根健司 2022 「アイヌ語復興活動にたずさわって」『月刊みんぱく』6：6-7.
- 田村雅史 2011 「アイヌ語研究史から見たアイヌ語教室」『ことばと社会』13：245-252.
- 丹菊逸治 2020 「アイヌ語復興のこれまでとこれから」『民族學界』45：5-48.
- トッピング・マシュウ・W 2021 「石垣市におけるしまくとぅばの言語イデオロギーと継承——参加型アクション・リサーチとしての事例研究」『島嶼地域科学』2：79-96.
- ハラルト・ハールマン 1985 『言語生態学』早稲田みか編訳 大修館書店.
- 本田優子 1997 『二つの風の谷 アイヌコタンでの日々』筑摩書房.
- 中川裕 1996 「少数民族と言語の保持」宮岡伯人編著『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社 pp. 263-280.
- 中川裕 1999 「アイヌ語復興の現状について」言語権研究会編『ことばへの権利 言語権とはなにか』三元社 pp. 30-37.
- 中川裕 2009 「アイヌ語学習の未来に向けて——考え方と提案」『アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会（第5回）資料2』1-11. <https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12251721/www.kantei.go.jp/jp/singi/ainu/dai5/5siryou.pdf> 2022年8月30日閲覧.
- 中川裕 2013 「アイヌ語」『日本語学』32 (10)：62-75.
- 成田英敏 2015 「sisam utar aynuitak eyayhonokka katu ene an i an wa ene ku=yaynu i (和人がアイヌ語を学ぶということについて)」『ことばと社会』17：190-208.
- 野崎剛毅 2021 「アイヌ語復興の可能性としての「言語の巢」」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』138：55-75.

- 平取町2020「平取町アイヌ総合政策推進基本計画」<http://www.town.biratori.hokkaido.jp/wp-content/uploads/2021/08/1b9a2c020c5cff264b6e923da12234fb.pdf> 2022年8月30日閲覧.
- 平取町 2022 公式ホームページ 人口 観光 <http://www.town.biratori.hokkaido.jp/> 2022年9月7日閲覧.
- 平取町二風谷アイヌ語教室 1988-2009『二風谷アイヌ語教室広報紙』創刊号～89号.
- 平取町立二風谷小学校 「本校の特色ある活動」<https://www11.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=0110018&frame=frm5ba48b33da02d> 2022年9月7日閲覧.
- 平取外八箇村戸長役場 1920『平取村外八箇村誌 第二版』.
- 北海道環境生活部 2017「平成29年北海道アイヌ生活実態調査報告書」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/H29_ainu_living_conditions_survey_.pdf 2022年8月30日閲覧.
- 吉本裕子 2014a『アイヌ展示の詩学——展示制作過程における協同（共同）を中心として』横浜市立大学 大学院 都市社会文化研究科 博士論文.
- 吉本裕子 2014b「創発的に生起する相互依存——二風谷アイヌ語教室の分析から」『第48回日本文化人類学会研究大会発表要旨』.https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasca/2014/0/2014_7/_pdf 2022年8月22日閲覧.
- 吉本裕子 2022「アイヌ文化の伝承者育成事業」が継承する「アイヌ文化」とは何か——アイヌ施策の再検討へ向けて」『公益財団法人横浜学術教育振興財団2021年度 助成研究等報告書』17-20.
- 若園雄志郎 2014「博物館におけるアイヌ文化の伝承者育成」日本社会教育学会年報編集委員会委員長野元弘幸編『日本の社会教育 アイヌ民族・先住民民族教育の現在』58：80-93.
- 渡邊香織 2018「首都圏におけるアイヌ語教育の現状」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』20：229-251.
- Irvine, J. 1989. *When talk isn't cheap: language and political economy*. *American Ethnologist* 16 (2) : 248-267.
- McCarty, T. L. 2018. Revitalizing and sustaining endangered languages. In J. W. Tollefson & M. Pérez-Milans (eds) *The Oxford Handbook of Language policy and planning*, pp. 355-378. Oxford University Press.
- Silverstein, J. 1979. Language structure and linguistic ideology. In R. Clyne, W. Hanks, and C. Hofbauer (eds) *The elements: A parsession on linguistic units and levels*, pp. 193-247. Chicago Linguistic Society.
- Te Ataarangi. Methodology. <https://www.teataarangi.org.nz/about/methodology> 2022年8月27日閲覧.

